

機関番号 : 17501

研究種目 : 基盤研究 (C)

研究期間 : 2008~2010

課題番号 : 20520231

研究課題名 (和文) イギリス文学における文化形成と宗教的テーマの研究

研究課題名 (英文) Researches on the relationship between the Formation of Cultural Concept and the Religious Subject in English Literature

研究代表者

園井 千音 (SONOI CHINE)

大分大学・工学部・准教授

研究者番号 : 70295286

研究成果の概要 (和文) : 本研究においては、17 世紀から 20 世紀にかけてのイギリス文学における宗教的テーマと文化概念形成の過程を文学的記述と社会的政治的歴史的資料分析を通して検証した。イギリス文学における文学的テーマの傾向は、イギリス社会における社会的政治的状況が複雑化するにつれ、次第に宗教的テーマを含む総合的なイギリス文化概念の主張をとることが証明された。特に 18 世紀後半から 20 世紀にかけての様々な社会的政治的混乱や近代化に伴う諸要因による宗教的影響力衰退に伴い、イギリス文学におけるテーマは政治的宗教的思想を含む文化概念の性質を示すことが明らかになった。

研究成果の概要 (英文) : Investigations in this study have been focused upon how the nature of the literary themes in English literature has been formed and modified through the cultural, historical and spiritual changes in British society. The study has been made by analysing the organic relationship between the literary products and the social, political, historical, and religious resources from the 17th century through the 20th century. According to the change and progress of socio-political complexities in English society, the literary themes of English literature inevitably reflected the innate sense which formed the concept of English culture and particularly, the religious concept. From the late 18th century to the 20th, according to the rise of new insights in science and changes in the religious attitudes of people, this aspect of the relationship between the cultural background and the literary outputs experienced a drastic change, especially in the possible butting between science and religion, or, philosophical concepts, generating cultural diversity, a sense of loss and skeptical attitudes, which formed the complexity of modern nature of English literature that can hardly be termed as modernism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：イギリス文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：イギリス文学、西洋史、思想史、哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) イギリス文学の道徳的特質は常に国民意識、国家意識形成において重要な役割を果たしてきた。これまでの研究において公共的テーマを持つイギリス文学は第一に国家的危機、政治的事件、思想的混迷を契機として成立し、その芸術的特質として道徳的信念、理想主義、宗教的信念等の複雑な感覚を内包することと、第二に、国家的混乱や社会的不安に対抗する道徳的構築力をそのテーマとして伝える機能を有することがわかった。このことについては、科学研究費助成による研究である平成 16 年度終了の「イギリス文学における人種問題とヒューマンイズムの限界に関する研究」と平成 19 年度終了の「イギリス文学における国家意識と道徳的テーマの研究」において特に 17 世紀から 19 世紀イギリス文学において検証と分析をした。

(2) これまでの研究においてイギリス文学の道徳的テーマは、例えば、17 世紀のアンダー・マーヴェル、ドライデン、ミルトン等の政治的宗教的作品が、国家批評、あるいは教育的意味において国民意識を構築する効果を与えたこと、また 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのロマン主義思想における理想主義的理念の矛盾と葛藤が危機的な政治的

場面、例えば、奴隷貿易廃止運動、共和主義思想の失敗、国家主義の台頭との関連において露呈すること等が証明された。これらの研究において文学的記述における道徳的理念が国家意識形成において重要な役割を果たすことがわかった。その中でも宗教的テーマはイギリス文学の公共的性質を特徴づけるものであるが、18 世紀末以降のイギリス文学においては、宗教的テーマに加え、イギリス国民意識を形成する要因としてのイギリス文化の概念化が始まったといえる。文学的記述がいかにより政治的社会的宗教的要因を内包する文化意識に寄与しているかを分析することはイギリス文学の新たな構築的意義を明らかにするものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究においては 18 世紀から 20 世紀にかけてのイギリス文学における文学作品と社会的政治的思想的資料の検索と分析を通してイギリス文化概念形成の過程を分析する。①ロマン主義文学においては、ロマン主義思想の基本的な非国教主義的性質がいかにその国家意識と調和しているのか、またロマン主義的理念の限界が国民意識形成もしくは文化形成に与えた影響を分析する。②19 世紀イギリス文学においてはジョージ・エリ

オット、マシュー・アーノルド、テニスン等の文学的記述と宗教的懐疑思想との相克を宗教的、思想的、政治的資料の分析とともにを行い、国民意識を形成する文化概念形成の過程を証明する。③20世紀文学においては、トマス・ハーディー文学以降の無神論的思想の系譜と国教主義との関連、また20世紀後半文学におけるイーブリン・ウォー、グレアム・グリーン等における宗教的テーマへの回帰を中心にイギリス文学の複雑な宗教的文化的側面を分析する。

(2) 本研究の特色はイギリス文学の公共的性質が有する文化形成におけるの広範囲の時代をカバーするダイナミックかつ総合的な研究であり、この研究により今日におけるイギリス文化概念の複雑な形成過程に対する見解を提供することができると考えられる。またイギリス文学の根幹的構成要素である宗教的テーマの変容と国民意識、国家思想との関連の総合的解明を目指す。本研究によりイギリス文学の国民精神構築という点における新たな解釈と展開の方向性を示す。

3. 研究の方法

本研究は次の4つの課題を中心に行った。

(1) ワーズワース、S. T. コールリッジ、サウジー、その他のロマン主義文学（アナ・バーボールド、ウィリアム・クーパーなど）における非国教主義思想とイギリス帝国主義との関連を宗教的・思想的資料（特に非国教主義の宗教的急進主義と社会的抑圧政策との関連を中心とする詳細な資料）、政治的・社会的資料（特にフランスのジャコバン体制とイギリスにおける共和主義思想に関する資料及び対ヨーロッパ諸国との外交関係資料）、当時の非国教徒を中心とする知的サークルの社会的活動に関する資料（ウェリントンアカ

デミーの社会的活動及びジョゼフ・ジョンソンの出版業に関する資料）を中心に分析し、ロマン主義思想の国民意識及び文化形成との関連を検証した。

(2) ジョージ・エリオット、ロード・テニスン、マシュー・アーノルドを中心とする19世紀イギリス文学における宗教的懐疑と社会的・政治的・思想的背景との関連を、C. ダーウィンの進化論説あるいは世紀末思想の影響を視野に入れ、宗教的・思想的資料及び新聞雑誌資料を中心に分析する。この検証を踏まえ、19世紀末の文学的状況分析と教養主義の解釈及び文学的記述におけるイギリス文化概念形成の再評価と再解釈を行った。

(3) 20世紀イギリス文学においては、トマス・ハーディー文学を近代的精神の嚆矢と解釈する視点においても、世紀末以来の宗教的懐疑はさらに深まっていると見るべきであり、この主題はジョージ王朝から戦争詩にいたるイギリス文学のある種の低迷期においてむしろ不可知論的方向性を示すに至る。この傾向は1960年代に至り例えばフィリップ・ラーキンにおける主題に観察されるとおり、20世紀後半のイギリス文学においても基本的トーンとして理解し得る。ただしこの傾向が一面的ということではなく、この時期においてウィルフレッド・オウエン、60～70年代における宗教的テーマ、アングリカニズム及びカトリシズムの攻勢等の要素が複雑に関連する。この検証を踏まえ、20世紀文学におけるイギリス文学の文化的テーマ及び文学におけるコンセンサスの性質を分析した。

(4) 上記課題の研究結果に基づき、イギリス文学における文化形成と宗教的テーマについて研究結果を纏めた。なお、課題(2)及び(3)

の思想的分析は研究分担者の分析協力を得た。研究資料収集及び分析は国内大学図書館（九州大学、東北大学など）及び大英図書館、ボドリアン図書館、ノッティンガムトレント大学図書館での調査研究を行った。研究分担者との打ち合わせは十分に行い、研究課題の充実した総合的結果が挙げられるように努めた。研究結果をコンピュータワークにより整理統合した。

4. 研究成果

(1)18世紀イギリス文学、特にワーズワース、サウジー、ブレイクのイギリスロマン主義文学作品における急進主義的思想及びイギリス帝国主義思想との相克を宗教思想的資料（主に非国教主義の宗教的急進主義と社会的抑圧政策との関連を中心に）と社会思想的資料

（1790年代を中心とするヨーロッパ諸国の共和主義思想と保守的政策との軋轢を中心に）の分析とともに検証し、イギリスロマン主義文学において共和主義的思想と国家主義的思想は対立的ではなく補完的構造を示すことを明らかにした。この過程における宗教的価値観の共有的性質は極めて重要であること、さらに以上の見解はロマン主義思想における限界を示唆するものではなく近代イギリス社会の文化意識形成の基盤となる思想的特徴として理解すべきこと確認した。

(2) 19世紀から20世紀初頭のイギリス文学において宗教的テーマと国民意識の影響関係を分析し、イギリスの文化意識がイギリス国民意識を総合的に統一するものとして形成された過程を考察した。具体的には、19世紀半ば以降、マシュー・アーノルド、テニスン等の文学におけるダーウィニズム等の科学思想や自然史観の展開による影響を受けた宗

教的懐疑と文学的テーマの葛藤を分析し、自然界における人間の位置とは何か、神によるデザインと進化論思想などの発展とのバッティングが必然的テーマであることを確認し、特にトマス・ハーディー文学における近代的不可知論思想は、イギリス国民意識に存在する宗教的危機意識、社会的統一感覚の後退等、ヴィクトリア朝思想の特徴的な不安感を要約すること、さらに、この文学的テーマの葛藤は20世紀初頭イギリス文化の混乱に継続されるが、反動的に1950年代以降におけるイギリス文化と文学の宗教的テーマへの回帰を予測させ、この流れが20世紀の国民意識形成と一致することを確認した。

(3) 18世紀から20世紀までのイギリス文学作品における文化概念形成過程と宗教的テーマとの関連についての分析結果の総括により、特に18世紀末から19世紀にかけて、イギリス社会においてはヨーロッパ諸国との植民地拡大などを中心とした社会的政治的葛藤や国内における社会改革運動の理想主義に存する一種の限界に対する認識がイギリス国民意識、国家意識形成に思想的影響を与えたことが明らかになった。また、この事実はイギリス国民意識に共通する文化概念の形成としても理解することができる。この傾向は世紀末から20世紀にかけてさらに強まり、科学的思想、生物学的洞察の顕著な発展（特にダーウィニズム）、社会コミュニティと個人との関係についての考察、宗教的懐疑主義などの影響により、近代イギリス文学における、懐疑的精神ないし不確定感ないし喪失感等の複雑で特殊な性質を作者と読者の共通認識として示す。例えば、トマス・ハーディーから1960年代後半以降における宗教的テーマへの回帰もその特質の一端を示すものだ。以上のようにイギリス文学における近代

的感觉がその文化的宗教的側面においてさらに複雑な構造をみせることが証明された。

(4) (1)~(3)まで述べたイギリス文学における思想的変容は、例えば、特にフランス革命以後、理想主義観念を体現する社会的改革を継続発展するフランス社会などの観念論中心の思想的変容とは異なり、宗教的哲学的社会的要素を含む文化的思想形成という点において特殊な性質を有すると仮定でき、本研究はさらにヨーロッパ社会の近代的思想発展におけるイギリス文化思想発展の方向性を体系的に明らかにする研究課題として現在、分析の過程である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① Chine Sonoj, “Southey and 1790s Radicalism in Relation to the Abolitionist Movement in England” (*The Wordsworth Circle*, 査読有, Boston: The Editorial Institute, Boston UP, 42.1 [2011], pp.22-26)
- ② 園井千音, 「コールリッジとユニテリアニズム-イギリス奴隷貿易廃止運動との関係を中心に」(『九大英文学』, 査読有, 九州大学大学院英語学・英文学研究会, 第 50 号, 2008 年 3 月, pp. 135-56)

[学会発表] (計 2 件)

- ① Chine Sonoj, “Southey and 1790s radicalism in the relation to the abolitionism movement in England” (Robert Southey and the Contexts of Romanticism, Keswick, U.K., 2010 年 4 月 16 日)
- ② 園井千音, 「ロマン派的懷疑と国家意識

形成」(イギリス・ロマン派学会 第 35 回全国大会, 成蹊大学, 2009 年 10 月)

[図書] (計 2 件)

- ① 園井千音、田吹長彦、初井貞子、他 9 名のうち 1 番目。(共著)『ロマン主義の光と影』, 東京: 音羽書房鶴見書店, 2011 年刊行予定)
- ② Chine Sonoj, *British Romanticism, Slavery and the Slave Trade 1780s to 1830s*, Kyushu UP, 2012 [forthcoming]

[その他]

Chine Sonoj, “British Romanticism, Slavery and the Slave Trade 1780s to 1830s” (Ph. D. thesis submitted to The Nottingham Trent University, U.K., November, 2009)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

園井 千音 (SONOI CHINE)
大分大学・工学部・准教授
研究者番号: 70295286

(2) 研究分担者

園井 英秀 (SONOI EISHU)
九州大学・人文科学研究院・名誉教授
研究者番号: 00069709